

# 項と付加詞の出没

——投射主義アプローチの検証——

登田龍彦

## 1. はじめに

本稿の目的は、項具現 (argument realization) 現象を説明するために Rapaport Hovav and Levin (1998) で提案されている投射主義アプローチ (projectionist approach) 分析の妥当性を吟味することである。本稿では、その不備を指摘すると同時に、項具現現象の記述のためには構文的アプローチ (constructional approach) の視点も必要不可欠であることを主張する。なお、本稿での議論は、動詞句内の項の出没に焦点を当て、主語項に係わる問題 (例えば、There 構文における虚辞をどのように位置づけるかという問題) については議論しない。

動詞 draw は、(1a)のように前置詞句 (from her purse) を省略できない場合と、(1b)のように省略できる場合がある。一方、動詞 put は、(2)から明らかのように、いかなる場合も前置詞句 (on the desk) を省略できない。

- (1) a. She drew a handkerchief \* (from her purse).  
 b. She drew a handkerchief. (= She drew a picture of a handkerchief.)
- (2) a. She put the book \* (on the desk).  
 b. \*She put the book.

この事実は、(1a)、(1b)、(2)に生起する動詞 draw と put の語彙的特性に依るものと一応記述できる。(1a)の draw は「取り出す」の意味を表しているのに対

して、(1b)の draw は「画く」の意味を表して意味が異なる。(2)の put は、draw のような多義性を示さない。

問題は、(1a)と(2a)における前置詞句 from her purse と on the desk はいずれも必要不可欠な統語的要素であるが、これらを一樣に(統語的)項((syntactic) argument)あるいは補部(complement)あるいは義務的付加詞(obligatory adjunct) (Goldberg and Ackerman 2001)と呼んで良いかという問題が生じる。本稿では、次節の議論を踏まえて、(1a)の from her purse を義務的付加詞、(2)の on the desk を項と呼び、これ以上呼称の問題には立ち入らない。

項具現とりわけ項省略現象の問題に係わる多様な問題は、動詞の語彙的特異性に依るものと主張されてきたように思われる(安井 1989, 岸本 2001, Jackendoff 2002)。本稿では、先ず、個々の動詞の意味にのみ基づいて統語的要素の総ての出没現象を説明できるのかどうかを検証し、問題の前置詞句の出没現象には動詞句全体の意味論的・語用論的意味が大きく関わっていることを指摘する。次に、この事実観察と Thomas(1979)の提案した非具現(nonrealization)と省略(ellipsis)の区別立てを抛り所に、特に Rapaport Hovav and Levin (1998)の投射主義アプローチの不備を指摘し、項省略現象を含めた英語項具現現象の記述が妥当であるためには、構文的アプローチの視点も必要であることと派生を含めた統語構造も考慮すべきであることを主張する。

## 2. 動詞句の結合的意味と付加詞の出没

本節では、先ず、動詞の意味とその補部を含む動詞句の結合的意味が、付加詞の前置詞句の義務性と密接に係わっていることを見てみよう。動詞 draw は、ピストルあるいは刀を抜く意味の場合は、「ケースから」という起点(source)の場所句を必要としないのに対して(cf. (3a, b)), ハンカチを取り出す場合は、起点の場所句が必要である(cf. (3c) (= (1a)))。

- (3) a. He drew {a gun/a pistol} (from the case).  
 b. He drew a sword (from the sheath).

- c. She drew a handkerchief \* (from her purse).
- d. She drew out her handkerchief.
- e. She put her hand deep into the bag and felt around for something. She drew a handkerchief.
- f. He drew a pistol (from his pocket).

この事実から、「予測できる問題とならない情報、すなわち重要ではない、言うに値しない情報は省略する」という一つのきわめて至極当然な原則を導きだせる。つまり、ピストルや刀は普通鞆や(ガン)ケースに納められていて、そこから抜いて使用するものと皆が分かっている。その場所を、わざわざ述べる必要はない。これに対して、ハンカチを納めるべき場所は多様である。例えば、バッグ、ズボンの後ろや横のポケット、胸のポケットと様々である。故に、場所句が必要となる (cf. (3c))。但し、急いで付言しておくが、今問題にしている起点以外の場所句が明示されれば容認できる (cf. (3d))。また、問題の場所が、文脈から復元可能な場合は、省略できる (cf. (3e))。

因みに、ピストルがケースでなくてポケットにある場合も、(了解されている)場所語句は省略できる (cf. (3f))。しかし、文脈無しで draw a pistol という場合、普通ケースから取り出して発砲する場合で、その日本語訳も、「ピストルを抜く」となるであろう。ピストルをポケットに忍ばせている場合には、日本語訳では「(ポケットから)ピストルを取り出す」となり、(スリなどの抜き取る行為以外の場面で)「\*ポケットからピストルを抜く」とはならない。「ケースからピストルを取り出す」とも言えるが、この場合必ずしも発砲場面に限定されないであろう。

(4)の分布も同様に説明できる。

- (4) a. He drew a nail (?) (from the plank).
- b. He drew some water (from the well).
- c. He drew a tooth (from his mouth).
- d. He suddenly drew a knife ({from/out of} his pocket).

釘を抜く行為は、釘がどこにあるかが問題ではなく抜けることが重要な情報である。水を汲む、歯を抜く、ナイフを抜くなどの行為においても同様である。汲める水がある場所は、無限にあるのではなくある特定の場所にしかない。歯は口の中にある。興味深いのは、ナイフの場合である。ハンカチの場合は起点場所を必要とするのに対して、ナイフの場合はそれを必要としない。ハンカチを日常生活で使用することは自然である。これに対して、ナイフの使用は果物を切って食べたり紐を切ったりする場合が普通であるため、(突然)ナイフを取り出すのは普通の状況ではない。故に、ナイフを取り出す行為それ自体が問題であり、それがどこにあったのかは二次の問題であると考えられる。

次に、動詞の項である直接目的語が生起しなくて、付加詞が義務的に生起する場合を見てみよう。Goldberg (1995) や Dixon (1991) は、(5a, b)において目的語は必要不可欠であるが前置詞句は省略可能であると述べている。

- (5) a. Jesus stole money (from the rich).  
 b. He stole ten dollars (from Mary's purse).

しかし、(6a, b) から窺えるように、目的語が省略されて、前置詞句が必要となってくる場合もある。剽窃 (plagiarism) が文脈に生起しているので、考えや主張などの情報概念が、目的語として現れなくても復元可能である。問題となっているのは、情報の出所である。この場合、起点前置詞句が省略されると等位接続詞で結びつけられる補文が意味を成さなくなり、文は非文となる (cf. (6b))。文全体の意味矛盾を防ぐためには、動詞 steal には起点前置詞句が必要であると言える。

- (6) a. It has been well said that to steal from one person is plagiarism, but that to steal from everybody is research. (Michael Swan, *Grammar* (2005: xiv))  
 b. \*It has been well said that to steal is plagiarism, but that to steal is research. (Toda 2007: 411)

更に興味深いことに、(7a)から明らかなように、drawには「画く」という意味の場合は別として (cf. (7b)), stealのような自動詞用法はない (cf. (8b))。

- (7) a. She drew \* (money) from her purse.  
 b. I have never been drawing (pictures) well.
- (8) a. She was caught stealing food from the supermarket.  
 b. Johnny was accused of stealing from the store. (*Macmillan English Dictionary*)

因みに、Jackendoff (2002) と Goldberg (2006) なども指摘しているように、動詞 put は普通目的語と場所の前置詞句の両方を必要とする他動詞用法しかないといわれている (cf. (9a))。しかし、場所語句は、目的語と異なり、文脈上の手がかりがある場合は省略できる (cf. (9b, c))。

- (9) a. She put \* (the book) \* (on the desk).  
 b. Speaker A: What did you decide to do about the money?  
 Speaker B: Put \* (it) in the bank. (Kuno 1983: 58)  
 c. John, Bruce and Mary were playing a game which involved putting something on the table. John put his book, Bruce put his pipe, and Mary (put) her glasses. (Groefsema 1995: 143)

以上、動詞と目的語や前置詞句の共起関係には、統語論的、意味論的・語用論的、談話上の様々な要因が関わっていることを見た。次節では、項具現現象について提案された Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチを吟味する。

### 3. 投射主義アプローチの問題点

#### 3.1 投射主義アプローチの記述的妥当性

Rapaport Hovav and Levin (1998) は、動詞の語彙的意味を示すイベント構造 (event structure) として(10)を仮定している (動詞の具体例は筆者)。

- (10) a. [x ACT<sub>(MANNER)</sub>] (activity) (e.g., *jog*, ...)  
 b. [x <STATE>] (state) (e.g., *blossom*, ...)  
 c. [BECOME [x <STATE>]] (achievement) (e.g., *arrive*, ...)  
 d. [[x ACT<sub>(MANNER)</sub>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (accomplishment) (e.g., *break*, ...)  
 e. [x CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (accomplishment) (e.g., *put*, ...)

(10)において、 $x$  と  $y$  がいわゆる統語上の項 (argument) に対応する要素であり、<MANNER> などのかき括弧内の要素は定項 (constant argument) と呼ばれるものである。活動 (activity) を示す(11a)を具体例として、Rapaport Hovav and Levin (1998) の主張を吟味してみよう。(11a)は、*sweep* の他動詞用法 (cf. (11b)) と自動詞用法 (cf. (11c)) の二つの意味を記述できるイベント構造と仮定されている。

- (11) a. [[x ACT<sub>(SWEEP)</sub> y]  
 b. Phil swept the floor.  
 c. Phil swept.

$x$  は構造参与者 (structure participant),  $y$  は定項と呼ばれる <SWEEP> の定項参与者 (constant participant) と呼ばれている。(Brisson (1994) は、 $x$  と  $y$  をそれぞれ構造項 (structure argument) と内容項 (content argument) と呼んでいる。なお、Rapaport Hovav and Levin (1998 : 111) は、定項参与者に  $y$  のように下線

部を付けて構造参与者から区別する方策を立てている。)前者は、統語構造において必ず生起し、イベント構造において語彙的主要部 (lexical head) に同定される下位イベントと結びつけられねばならない (後述する項具現条件 (Argument Realization Condition) と下位イベント同定条件 (Subevent Identification Condition) 参照)。後者は、語用論的推論に依って「プロトタイプ」の解釈が復元可能であれば省略される。例えば、Rapaport Hovav and Levin (1998 : 115) は、(11c)において掃除のイベントと結びつくプロタイプの表面は床であるので、他に文脈がなくても sweep の自動詞用法が可能となる、と説明している。

一方、(12)の場合は、(13)から明らかなように、*y*である the floor は二番目の下位イベント構造において定項参与者でなくて構造参与者であるため、省略できないと説明される。

(12) a. Phil swept the floor clean.

b. \*Phil swept clean.

(13) [[x ACT <sub>(SWEEP)</sub> y] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]

さらに、(14a, b)は、(16)の下位イベント構造の構造参与者 *z* に対応する the crumb と定項 <PLACE> に対応する onto the floor あるいは off the table がそれぞれ省略されているので (cf. (15a, b)), 項具現の条件を満足しないので非文法的と説明できる。

(14) a. \*Phil swept {onto the floor/off the table}.

b. \*Phil swept the crumbs.

(15) a. Phil swept the crumbs onto the floor.

b. Phil swept the crumbs off the table.

(16) [[x ACT <sub>(SWEEP)</sub> y] CAUSE [BECOME [z <PLACE>]]]

Rapaport Hovav and Levin (1998 : 113) が提案している統語論における項具現条件は、(17)である (cf. Rapaport Hovav and Levin 2001: 779)。

## (17) Argument Realization Condition:

- a. There must be at least one argument XP in the syntax for each structure participant in the event structure.
- b. Each argument XP in the syntax must be associated with an identified subevent in the event structure.

この条件は、少なくとも下位イベント構造の少なくとも一つの項は存在しなくてはならない、というものである。(14a)において、二番目の下位イベント構造の構造参与者として具現する項 XP が存在しないので、条件(17)を満足しないので非文であると説明できる。(14b)の非文法性については、二つの説明の可能性が指摘されている。第一の説明は、(16)の達成 (accomplishment) のイベント構造を仮定した場合である。この場合、the crumbs は第一番目の活動 (activity) の下位イベント構造の項ではなくて二番目の下位イベント構造の項であるが、この下位イベント構造を同定する (identify) 述語がないので非文であると説明される (cf. (17b))。これに対して、二番目の説明は、(14b)に対して(11a)のような活動 (activity) の下位イベント構造を仮定した場合である。この場合、the crumbs が掃除行為によって除去される移動物として解釈されるなら、単一イベント構造として結びつけられないので条件(17)に抵触して非文と説明される。残る唯一の解釈は、the crumbs が掃除される表面の意味を示すというものであるが、これは無意味な解釈となりあり得ない。以上が Rappaport Hovav and Levin (1998) の説明の骨子であり、引用例の説明については問題ないと思われる。しかし、この説明には難点がある。

Rappaport Hovav and Levin (1998) の条件(17)が唯一の統語論的に満足されねばならない項具現に課せられる条件であるとすれば、(16)における項がすべて生起する(18)は何故容認されないのかが説明されないままとなる。(統語論的具現に課せられる適格性条件として、(17)の他に「イベント構造の各下位イベントは統語論において語彙的主要部 (lexical head) に同定されねばならない」という下位イベント同定条件 (Subevent Identification Condition) があるが、(18a, b)では、各下位イベントは動詞 sweep と前置詞の onto あるいは into によって



それぞれ同定されていて、下位イベント同定条件は満足されている。)

- (18) a. \*Phil swept the table the crumbs onto the floor.  
 b. \*Phil swept the floor the crumbs into the dustpan.

(18a, b)の the crumbs は, Rappaport Hovav and Levin (1998) の分析では定項参与者でなくて構造参与者である。問題は, (18a)の the table と(18b)の the floor である。これらは, 既述したように, 語用論的条件が満足されれば省略可能な定項参与者である。この場合, 何故定項参与者は生起が許されないのであろうか。(16)の達成のイベント構造は, 活動のイベント構造と到達 (achievement) のイベント構造 (cf. (10c)) の鋳型 (template) を拡大 (augmentation) させてできたものである。イベント構造の鋳型拡大は自由に適用されると仮定されているが(Rappaport Hovav and Levin 1998: 111), (18)は問題となる項具現条件(17)を満足している。(18)において, イベント構造における構造参与者に対応する統語的項 Phil と the crumbs が生起し, 各々の統語的項は同定される下位イベント構造に結びつけられている。Rappaport Hovav and Levin (1998) の主張は, このままでは(18)の非文法性を説明できない。(18)の非文法性を説明するためには, 統語構造の制約を考慮すべきである。

例えば, Goldberg and Jackendoff (2004) の提案(19)を見てみよう。

(19) Full Argument Realization

All of the arguments obligatorily licensed by the verb and all of the syntactic arguments licensed by the construction must be simultaneously realized in the syntax, sharing syntactic positions if necessary in order to achieve well-formedness. (Goldberg and Jackendoff 2004: 527)

(19)は目的語を義務的に認可する動詞についての条件であって, 目的語を随意的に取る sweep などの動詞については何も規定していない。故に, 問題の動詞 sweep における項の具現に関しては, (19)は何も記述していないことになる。

(20a)から明らかのように、動詞 *water* は義務的に目的語を取る他動詞である。

- (20) a. \*Willy watered.  
 b. \*Willy watered the plants the ground wet. (Goldberg and Jackendoff 2004: 528)  
 c. Willy water the ground wet.

さらに、(20b)は、受動者 (patient) の *the plants* と *the ground* は一つの統語的位置を共有できないので、非文であると説明できる。しかし、問題の(18)では、受動者の *the table* や *the floor* と主題の *the crumbs* が共起しているものの、その意味役割は異なっているので、仮に Goldberg and Jackendoff (2004) の構文的アプローチが適用されたとしても、(18)の非文法性は説明できない。

次に、(21) (=9) に示すような動詞 *put* の分布の事実が Rappaport Hovav and Levin (1998) でどのように説明できるのか考えてみよう。

- (21) a. She put \*(the book) \*(on the desk).  
 b. Speaker A: What did you decide to do about the money?  
 Speaker B: Put \*(it) in the bank. (Kuno 1983: 58)  
 c. John, Bruce and Mary were playing a game which involved putting something on the table. John put his book, Bruce put his pipe, and Mary (put) her glasses. (Groefsema 1995: 143)

目的語名詞句省略が不可能であることは、例えば(22)のようなイベント構造を仮定した場合、*the book* が下位イベント構造において構造参与者であるためであると説明できる。

- (22) Verb of putting: [<sub>x</sub> CAUSE [<sub>y</sub> BECOME P<sub>loc</sub> z]]  
 (Levin and Rappaport Hovav 1995: 24)

一方、場所前置詞句の通常の文脈における省略が不可能であることは、下位イベントを同定する定項がないからであると一応説明ができる。ただし、(21c)のような場所句の省略可能性については、談話文脈上の情報が関与していることは明白である。先行文脈でテーブルに物を置くというゲーム内容が提示され、誰が何を置いたのかが問題となっている。また、第二節で概観したように、付加詞を含めた動詞句内要素の出没については意味論的・語用論要因が深く関わっている。従って、Rappaport Hovav and Levin (1998)の分析は、特に意味論的・語用論要因と語彙的意味構造の関係が明確にされていないという点で、不備があるように思われる。

更に、同類の例として、以下の用例について考えてみよう。

- (23) a. The nurses came out to wave Grandad goodbye. (*Longman Dictionary of Contemporary English*<sup>4)</sup>)  
 b. She waved goodbye to him through the car window. (*Longman Language Activator*)  
 c. Wave goodbye to Grandma, Charlie. (*Macmillan English Dictionary*)

統語論的には、(23a)は動詞 wave の後に二つの目的語が連続する二重目的語構文であり、(23b, c)はそれに対応する与格交替の構文である。(23)の文は、通常、手を振ることによってさよなら等の挨拶をする意味を伝えている(登田2006)。Rappaport Hovav and Levin (1998)の分析では、(23)は概略(24)のようなイベント構造を持つと仮定されるであろう。(ここでは、〈PLACE〉は例えば  $P_{loc}$  w の簡略標記を示している。)

- (24) [x ACT <sub>(wave)</sub> y] CAUSE [BECOME [z 〈PLACE〉]]]

(24)において、定項参与者 y の hand は省略可能であり、構造参与者 z の goodbye と定項 〈PLACE〉の Granddad, (to) him は省略不可能と予測される。しかし、この予測は、(23')からも窺えるように、構造参与者と定項が省略できるの

で、事実に反する。

- (23') a. The nurses came out to wave (Grandad) goodbye.  
 b. She waved goodbye (to him) through the car window.  
 c. Wave (goodbye) to Grandma, Charlie.

興味深いことに、wave には意味的に含意する hand のような名詞句を目的語として取る他動詞用法があるが (cf. (25a)), この場合 (25b-d) から窺えるように、問題の構造参与者に対応する good-bye は共起できない。

- (25) a. John waved his hand to Grandad.  
 b. \*John waved his hand to Grandad goodbye.  
 c. \*John waved his hand goodbye to Grandad.  
 d. \*John waved his hand Grandad goodbye. (登田 2006 : 178)

(25b, c, d) の非文法性については、既述したように、Rapaport Hovav and Levin (1998) の分析では説明することはできない。(25b) は、前置詞句が重量で (heavy) ない名詞句に先行しているため、Jackendoff (2002 : 142) が提案している統語範疇に課せられる語順制約 (NP > AP > PP > clause (where '>' = 'precedes')) 中の「名詞句は前置詞句に先行する」という規定に抵触し、非文であると思われる。それでは、(25c, d) の非文法性はどのように説明できるであろうか。問題の動詞 wave は、その意味からしてイベント構造 (24) において (主語の項以外に) 項を三つ取ると仮定することには、何ら問題はない。しかし、何故統語論的に動詞 wave は動詞句内に三つの項を取ることができないのであろうか。動詞 wave は、動詞句内に最大二つしか統語論的な項を取ることができないと記述しただけでは、項具現の本質を解き明かすことはできないように思われる。何故なら、考慮すべき重要な事実が二つあるからである。

まず、(26a-d) と (27g) に示すように、商取引動詞 pay や賭け動詞 bet などは、主語以外に項を最大限三つ取ることができる (Jackendoff 2002)。

- (26) a. Pat {sold/rented} a lawnmower to Chris for \$20.  
 b. Chris paid Pat \$20 for the lawnmower.  
 c. Fran bet Phil a cigar that Mark wouldn't come. (Jackendoff 2002: 135)  
 d. Fran bet Phil a cigar on Mark's not coming.
- (27) a. Fran bet a cigar.  
 b. Fran bet Phil. (Huddleston and Pullum 2002: 313)  
 c. Fran bet that Mark wouldn't come.  
 d. Fran bet Phil a cigar.  
 e. Fran bet a cigar that Mark wouldn't come.  
 f. Fran bet Phil that Mark wouldn't come.  
 g. Fran bet a cigar with Phil that Mark wouldn't come.

pay や bet は動詞句内に項を三つ取る場合、(25d)のような名詞句の三連続は許されない。語順上許されるのは、(25c)と同様の「動詞＋名詞句＋名詞句＋前置詞句」の語順 (cf. 26b, d), 「動詞＋名詞句＋前置詞句＋前置詞句」の語順 (cf. (26a)), 「動詞＋名詞句＋名詞句＋that節」の語順 (cf. (26c)), 「動詞＋名詞句＋前置詞句＋that節」の語順 (cf. (27g)) である。しかし、ここで注意すべきことは、語順「動詞＋名詞句＋名詞句＋前置詞句」において、動詞直後の名詞句は取引の金銭などの受け手 (goal) の意味を示すということである。問題の(25c)において、動詞 wave の直後の名詞句 his hand は受け手ではなくて受動者 (patient) である。更に、(25c)には取引の解釈もない。

さらに、注意すべきことに、*Longman Dictionary of Contemporary English*<sup>4</sup>の定義 (“to raise your arm and move your hand from side to side in order to make someone notice you”) から窺われるように、wave のプロトタイプの目的語として hand や arm が含意されるが、これら以外のもの (例えば handkerchief) を、文尾の前置詞句内要素として表現することは可能である。

- (23") a. The nurses came out to wave Granddad goodbye. (= (23a))  
 b. \*The nurses came out to wave Granddad goodbye with their hands.  
 c. \*The nurses came out to wave Granddad goodbye with their arms.  
 d. The nurses came out to wave Granddad goodbye with their handkerchieves.  
 e. The nurses came out to wave goodbye to Granddad with their handkerchieves.  
 f. \*The nurses came out to wave their handkerchieves Granddad goodbye.  
 g. \*The nurses came out to wave their handkerchieves goodbye to Granddad.

(23" b, c)では, with their hands や with their arms は wave の意味から予測可能であり余剰的である (cf. (23" a))。これに対して, (23" d, e) の with their handkerchieves は wave の意味から予測不可能であり余剰的でない。(23" d, e) は, 動詞直後の二つの要素が受け手と主題であり, 前置詞句が手段を表しているので, (26a, b, d)と同様に適格であると説明できる。Rappaport Hovav and Levin (1998)の問題点は, 定項参与者として記述される要素が本来の項すなわち動詞の目的語としてではなく, (義務的)付加詞的要素として表現されることに関して何ら予測することができない点である。換言すれば, Rappaport Hovav and Levin (1998)の分析は, イベント構造のプロトタイプ of 定項参与者は省略可能であるとし主張していないので (cf. (11c)), (23" d, e)における問題の前置詞句表現の生起可能性と(23" f, g)における非プロトタイプの目的語の生起不可能性を説明できない。

上記の三項動詞についての説明は, (18)の非文法性の説明にもそのまま当てはまる。

- (18) a. \*Phil swept the table the crumbs onto the floor.  
 b. \*Phil swept the floor the crumbs into the dustpan.

(18)の語順「動詞+名詞句+名詞句+前置詞句」において、動詞直後の名詞句はパン屑の受け手 (goal) の意味ではなくて受動者 (patient) であり、(18)には取引や賭けの解釈もない。しかしながら、(18)は、the table を前置詞句表現にすれば、文法的になる。

- (18') a. Phil swept the crumbs onto the floor off the table.  
 b. Phil swept the crumbs into the dustpan off the floor.  
 c. Phil swept the crumbs off the table onto the floor.  
 d. Phil swept the crumbs off the floor into the dustpan.

ただし、私のインフォーマントの判断では、(18' a, b)における onto the floor off the table と into the dustpan off the floor の語順より、(18' c, d)における off the table onto the floor と off the floor into the dustpan の語順の方が自然なようである。後者の語順の自然さは、起点 (source) と着点 (goal) の二つの前置詞句の連続が一つの〈PLACE〉への構成素として考えやすいということに起因していると思われる。

Rapaport Hovav and Levin (1998) の記述に従えば、定項参与者  $y$  は、〈PLACE〉要素として常に含意されていて、(15b)や(18')のように表現される場合と(15a)のように表現されない場合があると言える。

- (15) a. Phil swept the crumbs onto the floor.  
 b. Phil swept the crumbs off the table.  
 (16) [[x ACT <sub>(SWEEP)</sub> y] CAUSE [BECOME [z 〈PLACE〉]]]

Rapaport Hovav and Levin (1998) の記述の難点は、この定項参与者  $y$  は〈PLACE〉要素として含意されていることを表示していないことである。もしこの点を表示すれば、(16')のようになるであろう。

- (16') [[x ACT <sub>(SWEEP)</sub> y] CAUSE [BECOME [z BECOME P<sub>loc</sub> y to w]]]

(16')において、定項参与者  $y$  は必ず省略されねばならないというアドホックな但し書きを付け足せば、一応(18)の非文法性は説明できる。しかし、一般性のある説明とは言えない。さらに、(15a)において省略されている定項参与者はプロトタイプの目的語 *the floor* であると解釈されることになるが (cf. 11c), *the floor* は着点として生起しているので、このままでは説明に矛盾が生じてしまう。Rapaport Hovav and Levin (1998) の分析の問題の根源は、イベント構造に現れる項の統語形式への写像に係わる投射規則が明示されていない点であると言える。

以上の考察から、Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチ分析では説明できない事実があることが明白になった。次節では、これまでの議論を整理し、統語論的な構文上の情報を考慮に入れて初めて、項具現現象を説明できることを指摘する。

### 3.2 構文的アプローチの必要性

動詞句内に項を三つ取ることが許されている（現代英語における）構文は、商取引動詞 *pay* や賭け動詞 *bet* の場合だけである。特に、商取引の動詞に後続する二つの名詞句はそれぞれ受動者と主題を示す。（ただし、動詞に名詞句と前置詞句が後続する場合は主題と受動者をそれぞれ示す。）文尾の前置詞句は、金銭等のやり取りのためのある種の交換手段と考えられる。問題の語順が、この構文的意味を示すとすれば、問題の動詞 *wave* に生起する定項参与者  $y$  の分布も構文的意味から説明が可能となる。つまり、動詞 *wave* に後続する三つの連続要素は、受動者と主題とハンカチ使用という手段をそれぞれ示すと言える。動詞の直後に手段を示すハンカチなどの名詞句が生起する構文は、存在しない。同様に、動詞 *sweep* の直後に三つの要素が仮に連続しようとする場合、受動者と主題と手段の意味は表さないで、そのような構文は存在しない。構文的アプローチを提唱する Goldberg (1995, 2006) に従って言えば、場所表現が生起する場合の動詞 *sweep* は、掃除という行為をしてあるものをある場所に移動させることを意味する使役移動構文 (Caused-Motion Construction) の型（例えば、*John put the book on the desk.* を典型例とする構文型）に生起する動詞として解



積される。この解釈の下では、sweep の動詞句内に三項が生起する余地はない。これに対して、Rapaport Hovav and Levin (1998) では、イベント構造に現れる項の統語形式への写像に係わる投射規則が明示されていないので、そのままでは sweep の動詞句内に三項が生起することを排除できない。

次節では、項が具現しない場合は、Thomas (1979) のいう「省略」と「非具現」の二つを区別すべきであるが、Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチでは、両者を区別できないことを指摘する。

### 3.3 投射主義アプローチの理論的妥当性：省略と非具現の区別

Thomas (1979) は、(28)に示すように欠如 (absence) を3種類に分類している。

- |                              |       |
|------------------------------|-------|
| (28) a. John is eating.      | [非具現] |
| b. I wouldn't if I were you. | [省略]  |
| c. See you later.            | [脱落]  |

Thomas (1979) は、(28a)は非具現 (nonrealization) に属し、John is eating something から目的語の something が省略 (deletion) されて派生されるのではないと主張している。Thomas (1979: 43) は、非具現を文からの潜在的要素の完全な欠落と述べている。これに対して、(28b)は、省略 (ellipsis) の例で、統語論上文に実際に生起している要素にとって必要であるが、文脈上分かる (available) 要素を省略する談話上の選択であると述べている。例えば、(28b)では、特定の動詞句 go to York が省略されている場合等が考えられる。(28c)は脱落 (elision) に属し、I'll see you later. の I'll のように、削除が特に文頭に適用される。この場合の欠如は随意的で、文脈の助けを借りなくても言語体系の我々の知識から得られる特定要素の省略である。従って、この省略現象は、日記や非公式の話し言葉等のようなある一定の使用域 (register) に限られる。

では先ず、非具現とは何かを考えてみよう。Thomas (1979) はあるテストを使用して非具現と省略 (ellipsis) を区別している。Thomas (1979: 56-57) の挙

げている以下の談話(29)-(32)を考えてみよう。

- (29) A: Have you been reading 'Alice in Wonderland' ?  
 B: I've been reading, but not 'Alice in Wonderland'. [非具現]
- (30) A: Have you been eating onions ?  
 B: I've been eating, but not onions. [非具現]
- (31) A: Have you been watching television ?  
 B: \*I've been watching, but not television. [省略]
- (32) A: Do you expect to pass your driving test ?  
 B: \*I expect to pass, but not my driving test. [省略]

(29)についての Thomas の説明は次の通りである。文(29B)が可能なのは、文の前半部分が非具現であるために、動詞 read の目的語として先行文中に特定の要素（ここでは 'Alice in Wonderland'）が可能性のあるものとして了解される（understood）必要がないからである。従って、文の前半と後半の内容が衝突しない。この説明は、(30)の非具現の場合にも当てはまる。これに対して、(31)と(32)の場合は、答えの前半部分が省略（ellipsis）であるので、先行文のある特定要素（ここでは television, my driving test）が了解される必要が生じる。従って、後半部分が前半部分の内容を打ち消すため矛盾するので、それらの答え(31)と(32)の B 文は容認されないと説明される。

Thomas のテストを問題の文に適用してみると、私の数人のインフォーマントは以下のような結果を示した。

- (33) A: Have you been sweeping the floor ?  
 B: I have been sweeping, but not the floor. [非具現]
- (34) A: Have you been sweeping the floor clean ?  
 B: I have been sweeping, but not the floor. [非具現]
- (35) A: Have you been sweeping the floor clean ?  
 B: I have been sweeping the floor, but it isn't clean yet. [非具現]

- (36) A: Billy, have you been drawing your gun ? (draw = draw a picture of something)  
 B: I have been drawing, but not the gun (but nails). [非具現]
- (37) A: Billy, have you been drawing your gun ? (draw = pull out something)  
 B: \*I have been drawing, but not the gun (but nails). [省略]
- (38) A: Have you been drawing water ?  
 B: \*I have been drawing, but not water. [省略]
- (39) A: Have you been drawing water from the well ?  
 B: \*I have been drawing, but not water. [省略]
- (40) A: Have you been drawing water from this well ?  
 B: I have been drawing water, but not from this well. [非具現]

(33)と(34)のB文が矛盾を生じないことから、動詞 *sweep* の自動使用法における目的語は統語的操作に依って省略されたものではなく非具現であることがわかる。同様に、(35)から結果状態の *clean* の欠如 (*absence*) は非具現の例であると言える。特に、(33)と(34)のB文における *sweep* の自動詞用法において、Rapaport Hovav and Levin (1998) は、既述したように、問題の省略された目的語はプロトタイプである *the floor* と述べているが、この主張は、後続文によって打ち消されているので、妥当でないことが明白である。(36)と(37)-(39)の対比から明らかなことには、*draw* が「画く」の意味の場合は目的語の欠如は非具現であるのに対して、「引き抜く」の意味の場合は省略であるということである。因に、(40)の例から明らかなように、「引き抜く」の意味における起点の場所語句の欠如は非具現である。

このような欠如における省略と非具現の区別は、Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチでは捉えることはできない。既に第 3.1 節の(11)で見たように、動詞 *sweep* の自動詞用法の下位イベント構造において、目的語に対応する定項参与者は現れない。(29)-(34)と(36)-(39)において見られた非具現と省略の例における目的語の欠如は、いずれも下位イベント構造に

おける定項参与者の欠如として記述され、区別できないことになる。この種の区別は、統語論的な派生構造の概念を導入しなければうまく捉えることができないように思える。(ちなみに、同様の指摘が、Goldberg (2006) の構文的アプローチに対しても当てはまる (Toda 2007)。

さらに、第2節で見たような意味論的・語用論的要因と談話構造的要因が深く係わる(義務的)付加詞の出没現象も、Rapaport Hovav and Levin (1998) の分析ではうまく記述できない。何故なら、動詞の下位イベント構造では、コアの意味しか表示されていないので、問題となる諸要因を記述することができないからである。

#### 4. 結語

本稿の結論は、以下の通りである。

- 1) 動詞と目的語や前置詞句の共起関係には、統語論的、意味論的・語用論的、談話構造上の様々な要因が関わっていること。
- 2) 項具現現象を説明するためには、統語構造的な制約と構文的意味を考慮する必要があること。
- 3) Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチは、欠如における省略と非具現の区別を含む項具現現象を捉えられないこと。

本稿は、「どの程度項具現の意味的決定要素が語彙的なものであるのか、そしてどの程度それらのうちの幾つかが非語彙的であり得るのか」という Levin and Rapaport Hovav (2005: 3) が掲げている項具現理論が取り組むべき問題に取り組んだものである。Levin and Rapaport Hovav (2005) では、項具現と表裏一体をなす項省略についての考察は行われていないので、本稿での考察は少しは意義があると思われる。しかし、項具現現象の記述のための最適な立場は何かと問われた場合、現段階では投射主義アプローチと構文的アプローチを融合する立場であるとしか言うことができない。この課題についての詳細な検討は、別の機会に譲ることにする。

最後に、Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチでは考察の

対象外で、的確に記述できない構文的意味を示す典型的な例に触れておきたい。(41a)の動詞 sneeze には、自動詞用法のみしがなく、動詞直後の名詞句を受動文の主語にすることはできない (cf. (41b))。これは、議論してきた動詞 sweep と大きく異なる点である (cf. (42))。

- (41) a. Frank sneezed the tissue off the table. (Goldberg 1995: 152)  
 b. \*The tissue was sneezed off the table by Frank.
- (42) a. The floor was swept clean by Phil.  
 b. The crumbs were swept onto the floor by Phil.

Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチは、(41)を記述するためには、sneeze に(43)のようなイベント構造を仮定しなければならない。

- (43) [[x ACT <sub><SNEEZE></sub>] CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]]

(43)において、構造参与者  $y$  と <PLACE> は、それぞれ the tissue と off the table に対応する。(43)は、確かに「くしゃみをする」という活動を示す自動詞 sneeze が(41a)の構文に生起する場合のイベント構造を表現していても、自動詞 sneeze それ自体の意味構造 (すなわち [[x ACT <sub><SNEEZE></sub>]]) ではない。Rapaport Hovav and Levin (1998) の投射主義アプローチが動詞の多義性のみを対象にしているのであれば、(43)は自動詞 sneeze の多義の意味の一つではなく記述対象から外れる。(ただし、*The Oxford English Dictionary*<sup>2</sup>によれば、動詞 sneeze には、体内物特に口や鼻の中のを放出するという意味での他動詞用法がある。この他動詞用法とここで問題にしている用法との関係に就いての議論は、別の機会に譲りたい。)さらに、仮に彼らの分析が構文的意味を記述対象にするものであれば、その場合動詞それ自体の意味と構文の意味の区別がイベント構造ではできないことになってしまう。(構文的アプローチにおける動詞の意味と構文の意味の表記法については、Goldberg (1995, 2006) 参照。)

\* 貴重なコメントを下された三名の審査委員の方々と阿部幸一氏に、感謝したい。

### 参考文献

- Brisson, Christine (1994) "The licensing of unexpressed objects in English verbs." In *Proceedings of the Chicago Linguistic Society's 30th Regional Meeting with a Parasession on Variation and Linguistic Theory*, 90-102, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Dixon, Robert M. W. (1991) *A new approach to English grammar: On semantic principles*, Oxford: Oxford. Clarendon Press.
- Goldberg, Adele E. (1995) *A construction grammar approach to argument structure*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at work: The nature of generalization in language*, Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. and Farrell Ackerman (2001) "The pragmatics of obligatory adjuncts," *Language* 77, 798-814.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff (2004) "The English resultative as a family of constructions," *Language* 80, 532-568.
- Groefsema, Marjolein (1995) "Understood arguments: A semantic/pragmatic approach," *Lingua* 96, 139-161.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of language*, Oxford: Oxford University Press.
- 岸本秀樹 (2001) 「二重目的語構文」, 影山太郎 (編) 『動詞の意味と構文』, 127-153, 東京: 大修館。
- Kuno, Susumu (1983) "Principles of discourse deletion" *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguistics* (Tokyo 1982), 30-41.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument realization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) "Building verb meanings." In *The*

- projection of arguments: Lexical and compositional factors*, ed. by Butt, Miriam and Wilhelm Geuder, 97-134. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An event structure account of English resultatives." *Language* 77, 766-797.
- Thomas, Andrew L. (1979) "Ellipsis: The interplay of semantic structure and context." *Lingua* 27, 43-68.
- 登田龍彦 (2006) 「I hugged him good-bye について：非言語的伝達動詞と二重目的語構文」, 山田英二他 (編), 『ことばの絆』(藤原保明博士還暦記念論文集), 173-188, 東京：開拓社。
- Toda, Tatsuhiko (2007) "Notes on argument omission in English." In *exploring the universe of language: A festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the occasion of his seventieth birthday*. ed. by Amano, Masachiyo et al. 405-418, Department of English Linguistics, Nagoya University.
- 安井稔 (1989) 「英語における省略現象」『英文法を洗う』, 244-257, 東京：研究社。

## Synopsis

The Appearance of Arguments and Adjuncts: An Examination of the  
Projectionist Approach  
Tatsuhiko Toda

This paper is chiefly concerned with an examination of Rappaport Hovav and Levin's (1998) projectionist approach to argument realization, paying much more attention to the appearance of adjuncts as well as arguments in several kinds of constructions with restricted classes of verbs such as *draw*, *put*, *steal*, *sweep*, and *wave*.

It is shown in this paper that several kinds of constraints involving lexical, syntactic, semantic, pragmatic, or discourse factors govern the occurrence of the arguments and adjuncts. Thus, the prepositional phrase *from her purse* in *She drew a handkerchief from her purse* cannot be omitted, while the prepositional phrase *from the case* in *He drew a pistol from the case* can be omitted. The omissibility of the prepositional phrase in this case concerns the common knowledge as to the spatial relationship between the thing to be drawn like *a handkerchief* or *a pistol* and the source like *her purse* or *the case*. It is argued that Rappaport Hovav and Levin (1998) cannot give a satisfactory explanation of multiple argument or adjunct realization and omission. Their analysis is not adequate descriptively in that it permits the occurrences of ungrammatical sentences such as \**Phil swept the floor the crumbs into the dustpan* and \**John waved his hand good-bye to granddad*, which are derived from the full projection of the relevant subevent structures. It is also claimed that the ungrammatical sentences can be correctly ruled out within the framework of the constructional approach proposed by Goldberg (1995, 2006) and Goldberg and Jackendoff (2004) since neither of the relevant sentences can satisfy the constructional requirement that a construction with a verb followed by two noun phrases and a prepositional phrase means only transactions or wagers. The analysis is not theoretically adequate either in that it cannot distinguish between the two kinds of



absence proposed by Thomas (1979): nonrealization and ellipsis, illustrated by the absence of an object after the verb *sweep* in *I have been sweeping* and after the verb *watch* in *I have been watching*.

It is concluded that if the complicated phenomena concerning the appearance of arguments and adjuncts are to be fully accounted for, we have to adopt not only the projectionist approach but also the constructional approach in a description of the realization and the absence of arguments and adjuncts.